０５／０１／２３　　礼拝メッセージ　　岡田大輔　副牧師

主　　題：揺るがされぬ生涯を送るために　４
聖書箇所：ピリピ人への手紙　４章６節

昨晩聖書を読んでいたときにこのようなみことばに目が留まりました。**「悟りのある者の心は知識を求めるが、愚かな者の口は愚かさを食いあさる。悩む者には毎日が不吉の日であるが、心に楽しみのある人には毎日が宴会である。」**とこれは箴言１５：１４－１５のみことばです。この前の１３節には**「心に喜びがあれば顔色を良くする。心に憂いがあれば気はふさぐ。」**とあります。ソロモンの賢さというのはこのように箴言に顕著に現わされていると思いました。まさにその通りです。私たちが思い悩みに沈むときは毎日が不吉の日です。何が起こるか分からない、それに捉われてしまって身動きもできない、けれども、心に楽しみがある人には毎日が宴会のようであると。私たちが今ごいっしょに見てきているみことばというのは、ピリピ人への手紙の４章のところでした。前回、私たちはある意味非常に厳しいことばをパウロの口から聞きました。それは私たちが一切、間違った思い煩いをしてはならないということでした。心配することはたくさんあります。気にかかることがあります。家族のことや自分の将来のこと、いろいろなことに思いを巡らすことがあるでしょう。けれども、それが余りにも大きくなりすぎて私たちの心を縛ってしまい、身動きが取れなくなってしまうような、そんな思い煩い、不安、恐れを抱くなら、パウロは言います、「あなたは思い煩ってはいけない、間違った思い煩いをしている」と。パウロが「思い煩ってはいけません」という命令をしているがゆえに、また、イエス・キリストが全く同じ内容の命令を、山上の説教の中で私たちにするがゆえに、私たちはみことばを通して、このことを知ることができます。それは「神の前に不当な思い煩いをすることは罪である」ということです。私たちがこの地上のさまざまな事柄に思い煩い、心縛られ、身動きが取れなくなってしまうような生涯を送ることを神は願っておられません。だから神は言われるのです、思い煩ってはいけないと。けれども、この世の誘惑、私たちが不安に駆られてしまう、私たちが心配で心配でどうしようもないというような思いを抱く誘惑というのは、毎日の生活の中に必ず起こってきます。私たちはそれと日々戦い続けています。先週１週間振り返っただけでも、私自身そのような思いに駆られたことは何度もありました。どうすればいいのだろう、これはどのようになるのだろう？あの人はどうだろう、この人はどうだろうと、自分のことも含めて様々な思いが私たちの心を駆け巡るのです。そのような中で、もしかすると皆さんの中には、私たちが日常のそのような心遣い、気配り、不安、心配、そのようなことから完全に解放されることがあると、私が宣言すると、何を馬鹿げたことを言っているのかと思われる方がいるかもしれません。また、それゆえに、それがどれだけ不幸であったとしても、クリスチャンの中の多くの人たちは、実際にある毎日の生活の中に起こってくる様々な事柄に対する不安、恐れに捉われてしまって、その葛藤の中でどうしようもない、そのような状態に置かれてしまっていることがあります。そんなジレンマの中で葛藤し続けるのです。私たちはよく知っています。神が何も思い煩ってはいけませんと言われたことを。けれども、実際の生活を送っていると、それは無理なことではないか、私たちは不安というアリ地獄の中でもがき苦しみ続けなければいけないように感じるのかもしれません。いったいどこにこの問題の解決があるのでしょう？いったいどのようにして私たちは日常の生活の中に必ずある様々な事柄に対する不安、心配を打ち破って、平安に満ちた生涯を送ることができるのでしょう？今日の社会において、人々はそのような不安、心配が起こるとどこに行くでしょう？薬に行きます。様々な薬が実際に今日も今週も多くの不安をもっている人たちに投与されます。処方されます。そのようにして私たちは神が与えてくださる平安を私たちの生涯にもたらすのでしょうか？神が約束してくださっている平安を得るのでしょうか？多くの方たちは専門家と呼ばれる人たちのもとに相談に行きます。様々な精神心理学の学びをされた方たちのところに足を向ける人がたくさんいます。クリスチャンの中にもたくさんいます。そこで、ここ１００年近くの間に、発明され続けてきた、また、改良に改良が加えられている様々なカウンセリングと呼ばれるものを受けることによって、私たちは不安から解放され、平安に満ちた、神が与えようとする真の喜びに基づいた人生を送るのでしょうか？それはクリスチャンがすることでしょうか？それとも、聖書は私たちに、クリスチャンとして私たちはこうしなければいけないという具体的な指針を与えているでしょうか？今この現代社会の複雑化、とても早いペースでいろいろなことが動いている、そのように時代が変わってきたゆえに、聖書が私たちに教えている、このようにしてあなたは神との平安を得、それゆえに平安に満ちた人生を送ることができるのだという約束は、もう無効になってしまったのでしょうか？役に立たないのでしょうか？それよりもむしろ、私たちは専門家という人のところに行って、人が作り出した様々な解決方法に頼るべきなのでしょうか？

パウロはこのピリピ４章で、私たちがクリスチャンであるがゆえに持つことができる平安に満ちた生涯を、私たちに教えてくれます。どのようにしてそれを得ることができるのか、なぜそれが与えられているのか、どうしてそれを継続的に持ち続けることができるのか、パウロは言います。現代社会に生きる私たちに対して、人間が作り出した様々な薬や人間的なカウンセリング方法ではなく、聖書が与える平安の持ち方、不安の解決法、それがあるのだと。神は私たちクリスチャンに平安に満ちた生涯を送ってほしいと願っているのです。なぜなら、それを与えているからです。そして、神はどのようにして、この不安しか見当たらない人生の中で、平安に満ちた生涯を送ることができるのか、その方法を具体的に私たちに示してくれるのです。私たちはこれまで何回かに渡って、「平安に満ちた生涯を送るための必要条件」を見て来ました。

☆平安に満ちた生涯を送るための必要条件

１．聖書的喜びは平安をもたらす

この喜びは感情ではなく、神が私たちクリスチャンの最善のために、また、ご自身の栄光を最もすばらしく現わすために、ありとあらゆることを支配されていて、そして、それを私たちが確信をもっているゆえに、どのような状況の中でもすべては万全であると考える、それに基づいて与えられるのだということでした。このような根底からの確信をもっているゆえに、私たちは人生のどのような苦しみの中にあっても、喜びを失うことはないのです。

２．寛容に満ちた心は平安をもたらす

これは単に忍耐強く他の人から受ける様々な事柄に我慢することだけではなく、それと同時にその相手に対しても最善を行なうというその愛の態度、行動でした。パウロは言いました、それを人々の前ではっきり現わしなさいと。それによって平和を作ろうとするのです。少なくとも私たちの心の中に…。キリストはそのように行動されました。それが私たちの模範です。

３．人生に対する正しい対応は平安をもたらす

（１）思い煩いは平安をもたらさない

私たちがあらゆることに対して不当な思い煩いをしないということです。

先週まで３回、４：４－６を通してここまで学んできました。今朝私たちは、正しい対応の仕方のもう一つの要素、思い煩う代わりに私たちは何をしなければいけないのかということを学びます。簡単にひと言で言うなら、それは「祈り」です。

（２）祈り

祈りは私たちに平安をもたらします。私たちは思い煩わない代わりに、具体的に何をしなければいけないのか、その答えをパウロは教えてくれています。確かに、私たちの日々の生活のその歩みの中には不安な材料が山積みになっているように思います。一歩進めば不安にぶつかり、一歩進めば恐れにぶち当たり、一歩進めば心配につまづいてしまう、そのように感じるかもしれません。けれども、そのような人生の中で私たちが平安をもって生きるために必要なこと、それは、思い煩わないだけでなく、もう一つあります、それが「祈り」ということです。今日、皆さんといっしょにこのことを詳しく見て行きたいと思います。

パウロの命令

パウロはここで何を言っているのでしょう？そのことを理解することによって、私たちは不安が起こって来るとき、様々な分からない出来事に直面するときに、どのように神の前に平安を持つことができるのか、その方法を学んで行きたいと思います。それを実践することができれば、私たちは毎日に宴を設けることができるのです。そのようになりたいですね。パウロはこのように言いました。６節、**「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」**。先ほど言ったように、パウロはここで私たちに命じるのです。思い煩う代わりに何をしないといけないのか、「祈る」ことと答えます。このみことばを簡単に考えると祈ることを命じられていると思いますが、実際にパウロがここで命じていることは何か？そのことを最初に見ましょう。それは「祈りなさい」ではなく、日本語でも詳しく見ると分かるようにここで命令形とされているのは「知っていただきなさい」ということです。直訳すると「知られなさい」です。何を「知られなさい」でしょう？「あなたがたの願い事を」です。パウロは言いました、「ピリピの人たちよ、いろいろなことが起こってくるかもしれないし、そのことで心配することがたくさんあるかもしれないけれど、思い煩うのではなく、神にあなたがたの願い事を知ってもらいなさい、それが私の命令です。そうすれば、あなたは平安を得ることができるのです」と。

この命令に関していくつか説明したいことがあります。まず、この「知られなさい」ということばです。これは新約聖書に何回か出てくるのですが、そのほとんどが神が人々に対して何かを啓示されると

きに使われることばです。人々が神によって何かを教えられる、示される、啓示されるときです。それゆえに、このことばが使われると、それははっきりと示されるがゆえに一点の曇りもなく理解されることを表わします。人々がそのことを啓示されたときに、よく分からないなあ、と思うことはないのです。たとえば、天使たちが羊飼いたちのもとに現われてイエスの誕生を告げ知らせたときに、羊飼いたちはこのようなことを言いました。ルカ２：１５**「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう。」**、この**「知らせてくださった」**が同じことばです。羊飼いたちは告げられたことがはっきり分かったから**「この出来事を見て来よう。」**と言ったのです。そして、彼らはベツレヘムに行ってイエスが飼葉おけの中に寝ておられるのを見ました。そのときこのように言いました。１７節**「それを見たとき、羊飼いたちは、この幼子について告げられたことを知らせた。」**と、この**「知らせた」**ということばも同じことばです。今度は羊飼いたちが人々に知らせたのです。それを聞いた人たちは、１８節**「それを聞いた人たちはみな、羊飼いの話したことに驚いた。」**と、彼らの話したことがはっきり分かったからです。パウロはこのことばをエペソ３章で何度も使うのですが、そこでは、パウロが神から啓示された奥義を知らされたことについて、このことばを繰り返して使っています。パウロは奥義が何かをはっきり分かっていたのです。神によって教えられたからです。そのことばが今ここで使われているのです。**「あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」**と。このことばの使い方を新約聖書から見てみると、興味深いのは、神が人々に何かを知らせるとき、また、人々が人々に対して知らせるときに用いられているのですが、一箇所だけ例外があります。それはこの箇所４：６です。ここでは人間が神に知ってもらいなさいと言っているからです。なぜこのような話をしているのでしょう？一つ質問させてください。神は私たちの願い事を知る必要がありますか？神は私たちの願い事が何なのか知らないと思いますか？私たちは神が私たちの願い事に答えてくださるために、神に私たちの願い事が何かを告げに行かないといけませんか？否、皆さんの反応の通りです。でも、パウロは命令しているではありませんか？神に知られなさいと。どういうことでしょう？確かに、神はすべて知っておられます。私たちが祈る前から…。時に私たちはこの余りにも明白な真実が、実は本当ではないのではないかと思って祈っていることがあるのです。私たちが「祈り」を考えるとき、祈りというのが何らかの形で私たちの必要や願望を神に知ってもらうための手段であると考えることがあります。神は私たちの必要を私たち以上にご存じです。

　では、パウロはなぜこのようなことを言うのでしょう？その答えは非常に小さなことばに見ることができます。**「あなたがたの願い事を知っていただきなさい。」**とある中の**「神に」**というのがそれです。単にだれに向かって祈るのかということだけが語られているように見えるのですが、このことばは新約聖書の中に何度も出てきます。特に重要なのはヨハネ１：１です。**「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」**とこの**「神とともに」**が４：６の**「神に」**と同じ表現です。皆さんは、ヨハネ１：１の**「神とともにあった」**というのは、御子と父なる神が非常に近い関係、顔と顔を合わせているような関係にあったことを言っていると聞かれているでしょう？その通りですが、パウロが言うのは、私たちが私たちの願い事を知ってもらうにあたって、神の前に出て来ること、神と私たちが顔を合わせて向かい合って最も近い関係にあることを確認しつつ、私たちは神の前に出て来るのです。ですから、「神に」と訳されていることばを聖書の中に見ると、「神の御前で」とか「神とともに」とか「神に向かって」と表現されているのです。これは私たちの祈りの方向を示しているのではなく、パウロは、もし私たちのうちに何か不安に思うこと、心配ること、恐れることがあるなら、それをもって信頼することができる、それをゆだねることができる神の御前に現われなさいと言っているのです。私たちはイエス・キリストを信じることによって神との関係をもつ者となりました。それはキリストが永遠のときに神ともっておられた関係と似たようなものだとパウロは言うのです。そして、私たちには特権が与えられています。私たちがもっている様々な日々の心遣い、不安、恐れをこの神の御前に出して行くことができるのです。神との関係が与えられているから、神との和解があるからです。パウロはそのことを命じるのです。私たちが祈るのは、神に何か不足分があってそれを満たすためであるとか、神に説明するためではありません。私たちが神の知識を得るのです。祈ることを通して学ぶのです。私はこの神に信頼することができる、神の前に確かに現われることができる、神がすばらしい力をもって私の生涯を導いてくださること、それらを確認するために神の前に出るのです。イエス・キリストとの個人的な関係によって、私たちは御父への唯一の道を得たのです。だから、その御父の前に出て行くことができるのです。私たちはこの地上のことに捉われてはいないのです。もうすでに、神の御座の前に自由に現われることができる特権が与えられたのです。だからパウロはここで、クリスチャンにとって唯一納得の行く、根拠のある事柄を命令として与えているのです。**「あなたがたの願い事を知っていただきなさい。」**と。このことばをこのように要約できます。「この地上の事柄に目を向け続けることは止めなさい。むしろ、神にあなたの目を向けなさい」と、これがパウロの命令なのです。

どのようにしてこのパウロの命令を実践して行くのか

神に願いを知っていただくその方法を見て行きましょう。パウロは三つのことばをもってこのことを説明しています。それは、「祈り」と「願い」と「感謝」です。私たちが気を付けなければいけないことは、このことばを見て「祈ればいいのだ」と思ってしまうことです。この三つのことばをパウロが使ったことには理由がある、それに目を留めなければいけません。どのようにして私たちは神の前にこの命令を果たすことができるのでしょう？

祈り＝これは範囲が広いのです。新約聖書の中でこのことばが使われていると、これは必ず神に向かって祈る祈りを指します。非常に包括的なものです。告白、願い、執り成しなど、いろいろなものが含まれるのです。ギリシャ語の辞書ではこのことばは、神を呼ぶ、神に呼び求める、と訳すことができるとありました。最も一般的な祈りです。あなたは祈らなければいけないとパウロは言うのです。

では、具体的にどのような祈りでしょう？パウロは一つのことを加えています。願いによってと。

願い＝これは神に向かってだけ使われるのではなく、人と人との間のやり取りでも使われることばです。もともとこのことばが持っていた意味というのは、欠如する、欠けているです。それが新約聖書の時代になると、欠如するという意味が発展していって、必要があるとか、欲すること、また、たずねる、願うという意味に変わって行ったのです。つまり、ここでパウロが言っているのは、明らかな欠乏を見たがゆえにその欠乏を満たすために必要な事柄を求めることを指します。大きな分類の中の「願い」で、「私にはこのことが欠けていますから、神さま、どうぞそれを与えることによって欠乏を満たしてください」という具体的な祈りなのです。私たちの思い煩いは具体的ですから、それを具体的に神の前に言い表しなさいとパウロは言っているのです。このような祈りをする人は自分の置かれている状況をしっかり理解して、そこに欠乏しているものが何かが分かっているのです。だから不安を抱き、その不安を解消するために必要な事柄を神の前に具体的に祈るのです。

これら二つのことばが同時に使われることによって、パウロがここで強調していることは、私たちは祈らないといけないということです。一般的な祈りと具体的な祈りによって。これが私たちが「神に私たちの願いを知ってもらいなさい」という命令を果たすために私たちが取るべき行為なのです。

感謝＝ここで私たちがあらかじめ理解しておくことは、「祈り」と「願い」はその後に「よって」ということばが付けられていることからも分かるように、命令を果たす方法だということです。具体的に神に私たちの願い事を知られるための方法です。それが「祈りと願い」なのです。ところが、**「感謝をもって」**とあり、これは方法ではないのです。態度です。私たちが祈りと願いという方法をもって、神の前に私たちの願い事を知っていただくときに持つべき私たちの態度なのです。それが「感謝」であることを教えるのです。ですから、このことばを加えることによって、もし私たちが祈り願おうとするならそのとき感謝の態度をもたなければならないと言うのです。実際に不安に駆られるとき、私たちに一番欠けているのはここです。なぜ平安に満ちた人生を送ることができないのか、祈りということだけに焦点を合わせるなら、それは感謝が足りないからです。「こんなに酷い状況の中で私は何一つ感謝することなど見つかりません。」と。確かにその通りかもしれません。しかし、クリスチャンであるなら感謝できない、感謝の態度がないというのは、どこか根本的におかしいのです。なぜなら、三つの理由があります。一つは、私たちは過去において神からのすばらしい祝福を受けているのを知っているから、今どのような状況に置かれていても、その祝福に感謝できるのです。神は私を救ってくださったのです。永遠のいのちを与えてくださった、それでも今感謝できないというなら、その信仰自体をよく考えてみないといけません。救いだけではありません。これまでの人生で神はすばらしい恵みを与え続けてくださった、数えることができます。現在を思っても感謝することができます。神の約束があります、今経験している様々な試練は私たちが負いきれないものではないと。Ｉコリント１０：１３にそのように書かれています。**「あなたがたのあった試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。」**。私たちはよく言います、すべてのことを神は私たちの益としてくださると。今、益となっているのです。ローマ８：２８**「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」**、そのときは祝福に見えなくても神に感謝することができるのです。しかも、神は言われます。私たちが様々な困難な中を通って行くことによって私たちを完成させると、Ｉペテロ５：１０**「あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。」**。私にとって受けるにふさわしい最善を決めるのは神であることを私たちはしっかり覚えなければなりません。私たちは自分の最善が何であるかを知らないからです。未来における約束についても私たちは感謝することができます。救いを完成してくださるのです。永遠の平安を神は与えてくださるのです。

私たちは祈っているとき、今の現実だけを見て感謝を捧げる理由を見つけることができないかもしれません。けれどそのとき考えないといけません。神がどのようなお方かを。そのとき、私たちの心は神への感謝にあふれます。その感謝を持って神の前に祈り願うのです。感謝の態度をもつことは単に「ありがとう」というだけではありません。神がなさることは最善であると知っているから、私はあなたのみこころのままに従いますと言うことです。感謝の態度は従順、服従の態度でもあるのです。

ある聖書注解者はこのように言っています。「人々が心配し不安になり恐れを抱くのは、彼らが神の知恵、神の力、神の良さを信頼しないからだ。」と。様々な理由によってその信頼が打ち崩されることがあるかもしれません。その中には不信仰、罪が含まれるでしょう。様々な状況が人々の目をくらませることがあります。けれども、感謝をもって捧げる祈りは私たちを恐れや不安という束縛から解放するのです。なぜならその祈りは、神が主権をもってすべての状況を支配し神の目的の通りに最善を為してくださっているというということを認めるからです。

もう一つ、まだ触れていないことばがあります。**「あらゆるばあいに、」**です。ここでパウロが言っているのは祈りの内容で、原文では「すべてにおいて」と訳されることばです。けれど、私は敢えてこのことを祈りの内容というよりも、皆さんがどれくらい祈るかということにチャレンジしたいのです。パウロは言います。「何も思い煩わない、でも、ありとあらゆることをその願いをもって祈り、感謝をもってささげなさい」と、すべてのことを祈ったなら、一日どれくらい祈るでしょう？時間は足りません。「すべてのことを祈る」、私たちがこの命令を真剣に果たそうとするなら、多くの時間が必要です。皆さんはそれほど祈っておられるでしょうか？ヤコブは私たちが願っていることがなぜ与えられないのかということに関して、このようなことを言っています。４：２**「あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。」**と。皆さんはすべてのことを願っておられるでしょうか？

私たちの愛する讃美歌の一つ「いつくしみ深き」の、原文の２番の歌詞はこのように歌っています。「ああ何という平安を私は余りにも多くのときに失っているのだろう、ああ何という不必要な苦しみを私は負っているのだろう、そのようなことが起こるのは、すべて私がありとあらゆる事柄を祈りをもって神のもとに持って行かないからだ」と、この通りです。こんな不安に満ちた人生、心配、恐れに駆られる人生はなんと辛いことか、そこには苦しみがあります、それから解放されたいと願うのは当然のことです。私たちがあらゆる手段を使ってそれらをできるだけ小さいものにしようとするのは当然のことです。しかし、クリスチャンであるならそのような苦しみは不必要なものです。私たちはそれを神の元にもって行けるからです。解放はもうすでに与えられているのです。問題は私たちがそれを神の前に願っているかどうかです。私たちは「祈ります」「祈っています」と言いますが、そのためにどれくらいの時間、祈っているでしょう？

私たちが感謝をもって願い祈っても平安が与えられないのは、神の前にその願い事をもって出ているのに、神にそれらをゆだねきっていないからです。また、自分のもとに持ち帰るからです。ペテロは言います。Ⅱペテロ５：７**「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」**と、「神に投げ掛けなさい」と言います。投げつけなさい、もう要らない、あなたに任せると言いなさいと。私たちが神に目を向けるといいながらこのようにしないなら、いつまで経っても平安は生まれません。地上のことに思いが残っているからです。

祈り、それは平安というすばらしい神の祝福の洪水を私たちのもとにもたらすカギです。私たちの毎日が喜びで満たされ、揺るがない平安の中で神を賛美し続ける、そのために私たちは正しく祈らなければならないのです。

この後、私たちは７節から神が与えている平安について、その約束について見ます。８－９節では具体的にその平安を得て私たちが生きて行くために、私たちが何をしなければいけないのか、そのことを見て行きます。次はいつになるのか分かりませんが、また皆さんとその学びができることを楽しみにしながら、私たちが不安に駆られることなくこの人生を過ごすことができるように願いつつ、ともに励まし合いながら生きて行きましょう。